

## 愛がなければ

学長 長谷部 弘

<sup>31</sup> あなたがたは、もっと大きな賜物をうけるよう熱心に努めなさい。

そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。<sup>1</sup>たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。<sup>2</sup>たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。<sup>3</sup>全財産を貧しい人人のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

<sup>4</sup> 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。<sup>5</sup> 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。<sup>6</sup> 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。<sup>7</sup> すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

コリントの信徒への手紙Ⅰ 12章31節-13章7節

今日は、コリント人への第一の手紙を手がかりに、宮城学院がその教学組織・制度の要としている大学礼拝とは何であるのか、またそこに集う私たちにとって最も大事なことは何であるのか、一緒に確認してみましょう。

結論は、神の教会であり、さらに「愛」それも「神の愛」です。

日本語で「教会」と訳されている言葉は、二つのギリシャ語のルーツがあると言われています。一つは「エクレシア」(＝呼び集められた者たち、集会)という言葉です。もう一つは、「キリアコン」(＝主に属する者たち)という言葉です。エクレシアの派生語は、今でもフランス、スペイン、ポルトガルなどでそのまま「教会」という意味で用いられていますし、キリアコンの派生語の方は英語圏ではチャーチ、ドイツ語圏ではキルヘ、オランダ周辺ではケルクが、日常的に教会を表す言葉として用いられています。ちなみに、それらギリシャ語の原義からすれば、日本語の「教会」という言葉は、「教える集会」という意味ですから、字義通りに考えると御言葉が語り伝える、教育するという側面が強調されすぎる訳語かもしれません。中国語で「チャオウヘイ」、朝鮮の言葉では「キョヘ」で漢字にすれば日本語と同じですので、おそらくは語感も意味もさほど違いはないのでしょう。そんなことを考えると、私たちは、教会とは一体どんな存在なのか、という問題についても、本来の言葉の意味に立ち返りつつ、新たに考え直し続ける必要があるようです。

今日お読みしたコリント人への手紙は、エフェソという小アジア・トルコの都市の教会から、エーゲ海を挟む対岸のペロポネソス半島北部の商業都市コリントにある教会へと書き送った手紙の一部です。ギリシャ・ローマ的文化と商業都市の猥雑さが満ち満ちたコリントという古代都市、そこで主日ごとに礼拝が行われイエス・キリストの御言葉＝福音に生かされていたはずの人々の群れ。それが、パウロが手紙を書き送ったコリントの教会でした。しかし、ご一読いただければわかるように、その教会の実態は、悔い改めて生きるキリスト者としては実に問題の多い、言わば未熟なキリスト者、まだ自分たちの救いの本当の意味が十分に会得されていない、求道者に近いような人々が多く含まれているような群れだったのです。

パウロは、先立つ12章全体で、エクレシアの群れ＝共同体がお互いにどのような関係を持つことができるようになるか、その理想型を、人間の身体の描く部分と全体、という比喻で説明しています。力のある部分や優れた能力のある部分だけでなく、弱いように見える部分も、見劣りする部分も、全て含んで人間の身体です。その身体の間で分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合い、一つの部分が苦しめばすべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、全ての部分が共に喜ぶ。それが一つ身体のあるべき姿です。しかし、教会はなかなか一つ人間の身体のようにはなれない。それが実際に可能となるのは、教会が、イエス・キリストの一つ身体として一致した信仰をもつようになる時なのだ、パウロはそう語るのです。

さらにパウロは言います。「あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます」と…。パウロにとっては、いくら信仰熱心に見えるような「天使たちの異言」を語っても、その熱心さに愛がなければ、単なる人騒がせな「騒がしいどら」「やかましいシンバル」と同じなのです。また、いくら神様の御言葉を適切に語ることができ、旧約から続く神秘的かつ深遠な知恵に通暁していったとしても、そして、いくら「山を動かすほどの完全な信仰」を持っていたとしても、「愛がなければ、無に等しい」というのです。そしてさらに、いくら「全財産を貧しい人々のために使い尽く」したとしても、いくら誇りをもって殉教の死を選んだとしても、そこに愛がなければ、「わたしに何の益もない」と言い切るのです。

彼は、その上で、4節以下で、「愛の讃歌」と呼ばれてきた有名なフレーズを述べます。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」。

このような「愛」とは、実は人間が自分の力で、自分の思いだけで達成しようとしても、実践できるものではありません。パウロ自身がそれを、ローマの信徒への手紙やガラテヤの信徒への手紙の中で、いわゆる信仰義認論として展開しています。私たちは、神ご自身が私たち人間の世界にイエス・キリストという姿で突入して来てくださったことにより、そして私たちの人間的常識を覆すような十字架と復活という不思議な出来事を実践してくださったことによって、その現実性が実際に示されたのです。神ご

自身が、そのようなとてつもない愛のお方であり、神ご自身がそのような愛を実践してくださった方だから、私たちは、それに従うことによって神の「愛」の実践が可能となったのです。

この「神の愛」こそが、実は、エクレシアと呼ばれたり、キリアコンと呼ばれたキリストの教会の本質なのです。

MGUにおける学生たちも教職員もみな神に呼び集められた群れであり、神ご自身が建てられた教育事業体に仕える人々です。呼び集められる場が、大学礼拝の場です。それによって、宮城学院全体が、礼拝に集うものを中心として直接間接結びつけられた一つ身体のような群れ、とされるのです。思い切って言ってしまうと、私たちは、宮城学院という教会に呼び集められ、そこに属しているキリストの教会なのです。

みなさん、そのような者の一人として、御言葉に聞きましょう。

信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

その愛を持って、宮城学院の働きに日々取り組んでまいりたいと願うものです。

祈ります(祈禱)。

(2023 年 5 月 24 日)